

HallidayのFunctional Grammar(機能文法) とテキスト分析への記号学的応用の試み

古岩井嘉蓉子

1. はじめに

M.A.K. Halliday (ハリディー) の *An Introduction to Functional Grammar* (1985: Edward Arnold 出版) が1985年に出版されている。この書物に書かれている事柄は、Halliday がオーストラリアのシドニー大学に於て長年、機能文法とその discourse (ディスコース) 分析への応用を教えてきた資料と同じ内容であるが、その本こそ Halliday の年来の研究の集大成とってよい書物である。彼自身が述べているように講義のために準備されたわずか17ページのノートが約 400ページにまで拡大発展され、そしてこの文法は、今まさに言語現象あるいは言語に類似した現象たとえば、映画、広告、写真等にまで分析手段として応用されようとしているのである。何故、機能的 (functional) であるかということ、この文法は形式よりむしろ機能に重点がおかれていることが、まず第一に挙げられる。Halliday の機能文法を理解する上で三つの点を挙げなければならない。

第一に、この文法は言語が^{いかに} (How) 使用されているかを説明する意図で集大成されたものである。あらゆる書かれたもの又は、話されたもの——テキスト——は、言葉の生きた姿を表示していると考えられる。言語は、それ自体が体系をなして、自然に人間の要求に合うように進歩発展してきたのである。従って、言語は完全に恣意的なものとはいえない。人間に関するあらゆる事物について、人間の使用する言葉が、^{いかに} (How) 用いられているかということを探ると、かなり言語について説明がつくという主張である。第二点として言語における意味の基本的構成

この小論は1988年8月カナダのブリティッシュ・コロンビア大学で開催された国際記号学研究会で学習した一部を整理分析したものである。興味深い講義をされたシドニー大学の T. Threadgold 先生及びその co-ordinators をされた G. Kress, P. Thibault 及び T. van Leeuwen に心からの謝意を表わします。

要素は機能的である。すなわちメタ機能といわれる要素——観念内容的（‘ideational’）と対人関係的（‘interpersonal’）——は、すべての言語体系中に二つの面として表出されるのである。まず各人の言語を通して我々は状況を分節し、それを現象として捉えているのである。もう一つは、言語は対人関係の中で作用しているという点で対人関係的機能といえる。相手なくしては、言語として機能したとはいえないわけである。これらの二つの要素が相かさりあって全体のテキストに意味を与えるのである。第三点として、それら二つの要素は、言語体系全体のなかで言語のもつそれぞれの機能関係によって説明されうるのである。この点で機能的文法といえるのである。三つの〈メタ機能〉は‘ideational’な（観念内容的）意味と‘interpersonal’な（対人関係的）意味、そして‘textual’な（テキスト形成的）意味を荷負う機能要素であって、これらは言語体系全体の中で有機的に結びついている。

Halliday の考えでは、言語は形式の体系に意味が付随したものとする。ギリシャ時代より従来の西洋の言語学のアプローチでは、まず第一に語の形成すなわち形態学（morphology）、次に文の形式に進み、その文の構造は何を意味するのかという問題に入っていくのが、これまでの大多数の文法家のやり方といえる。しかし機能文法では、従来のこの方向とは逆になる。まず言語は、意味の体系として理解するのである。意味の上に形式が被さっていると考え。更にこの文法の的を絞ると、問題意識としては「意味内容はいかに（How）表現されうるのか？」といえるのである。

Halliday はこの書物（*A Short Introduction to Functional Grammar*）を通してテキストの分析のための文法を示している。現代英語における口語、文語によるあらゆるテキストを含む分析のための手段を提供しているといえるのである。だから、いかなる談話分析についてもこの機能文法は、かなり有益であると Halliday は考えている。その対象は民族学に関するもの、文学、教育に関するもの、教育法に関するものと、その幅は広いようである。

談話分析（discourse analysis）の目的は大きく分けて二つ考えられる。一つはテキストの理解のため、すなわち、言語学的分析によっていかに（How）、何故（Why）、何（What）をそのテキストは意味しているのかを示すのに役に立つのである。もう一つの目的は、テキストの評価のために

この機能文法が役に立つということである。あるテキストが何故、その使われている言語表現の点で優れているのかといったことを見つけるのに Halliday の機能文法は有効な手立てといえる。又どのような点でそのテキストは成功しているのか、あるいは失敗に終わったのかといった点も多分調べることができるだろう。特に言語的特徴がいかにテキスト作成の意図や内容的状況と体系的に関連性があるかを考えてみることができる。テキストは意味の単位であって文法的単位ではないが、意味内容は語連鎖を通して具現化されるのである。だから語法の理論なくしてすなわち文法なくして、テキストの意味を解釈することができないのである。テキスト言語学 (Textlinguistics) あるいは談話分析 (discourse analysis) は文法なしではあり得ない。もしあるとすれば、それは錯覚にすぎないのであると Halliday は考えている。

2. 意味内容としての文の分析方法

言語あるいは言語行為に似たものは、前述した三つのメタ機能を備えている。表面的な文 (語連鎖) の文法構造 (grammatical structures) は、その言語の文法体系 (grammatical systems) によって具現化されるからいかなる文も三つのメタ機能すなわち観念内容 ('ideational') の意味構造、対人関係の意味構造そしてメッセージとして分析することができる。これら三つの構造が文の中に組み込まれ文として生成され表出される。

まず観念内容的機能として文構造の中に埋め込まれている抽象観念である〈移行過程〉 (transitivity) の体系がその文の主なる文法体系とみることができる。この〈移行過程〉 (transitivity) の体系は現実の出来事、現象をいかに分節していくかという選択方法に係わるものである。現実を分節するのに三つの構成素 (constituents) を考えることができる。

(1) 〈過程〉 (process)——現実についてそれぞれ違った意味を表わす動詞によって具現化される。

(2) その〈過程〉はその参加者の数とタイプによって文法的に他の動詞と区別される。その〈過程〉の〈参加者〉 (participants) は名詞によって表わされる。

(3) 第三の構成素 (constituents) は〈過程の状況〉 (circumstances) であり、これは副詞 (句) あるいは前置詞句によって具現化される。例えば

次の様な二つの文を transitivity の体系によって分析を試みる事ができる。

- ① Over 500 people drown in Australia every year
 participant process (EVENT) circumstance 1 circumstance 2
- ② Australia has one of the highest childhood drowning rates
 participant 1 process (POSSESSION) participant 2
- in the world

これら二つの文は同じ出来事（溺死）に関して述べている。しかし第一の文はその使用されている動詞は〈出来事の過程〉（‘event’ type of process）であり、第二文では〈所有の過程〉（‘possession’ type of process）が用いられている。加えて第一文ではオーストラリア（Australia）は場所を示す状況（circumstance of place）であり、第二文ではオーストラリアは所有者である〈参加者〉（participant）となっている。動詞 drown については、第一文では〈過程〉を示し、第二文の drowning は〈参加者〉の属性の一部と考えられる。現在起っている現実あるいは経験していることを、いかに（How）表現するかは、どのような文法構造を選択するかに係っている。又そのテキストが生み出される社会的コンテキストも係わってくるのである。第一の例文は、新聞からの引用文であり、第二文は新聞に掲載された政府の調査発表からの引用文である。調査誌に書かれている文は抽象的、一般的そして長い間繰り返されてきた出来事として表現しようとする傾向がみられるといえる。一方、新聞の直接の報道は、何をやったか、そして何が起きたかということに対して直接的、具体的、限定的な表現形体をとる傾向がみられるというのが短い文の分析からも感じられるのである。三つの構成素（Constituents）をここで簡単に説明してみよう。

(1) 〈過程〉（Process）のタイプについて

(a) 〈物質的過程〉（Material process）

○意味— 〈行為〉と〈出来事〉を表わす。

○構造

(i) 二つの〈参加者〉（Participant）をとる場合：

〈行為者〉（Actor）+〈過程〉（Process）+〈目標〉（Goal）

e.g. She revived him.
 <行為者> <過程> <目標>

revive(v.) は伝統文法でいえば、他動詞の範疇であり、動詞自体の行為は、他の対象物すなわち目標に向けられている。

- (ii) 一つの<参加者>(Participant)をとる場合：<行為者>(Actor)+<過程>(Process)

e.g. He fell.
 <行為者> <過程>

この場合、行為者は he kicked の文にみられるような行為者の意思が入る時と、he died の文における die のように意思の入らない動詞があることに注意しなければならない。

○検証方法(Probe)

- (i) 二つの<参加者>をとる<物質的過程>の動詞の場合
 She REVIVED him. という答を求めるには WHAT did she DO TO him? という質問が可能である。
- (ii) 意思を含む一つの<参加者>をとる<物質的過程>の動詞
 WHAT did he DO? (He KICKED.)
- (iii) 意思を含まない一つの<参加者>をとる<物質的過程>の動詞
 WHAT HAPPENED TO her? (She DIED.)

ここで注意することは、抽象的<行為>と<出来事>がある。例えば、二つの<参加者>をとる<物質的過程>には、事物や行為に対する意向を示すような性質がある。例えば he RENOVATES the house の RENOVATES の過程の中にすでに目標(Goal)が存在している。次に、目標自体が創造的過程に関するような例を挙げてみる。

e.g. He builds the house.

(b) <精神的過程>(Mental process)

○意味

- (i) 感覚を表わす。e.g. see, hear, etc.
 (ii) 感情を表わす。e.g. like, fear, wish, etc.
 (iii) 認識, 思考を示す。e.g. think, know, believe, etc.

○構造

〈知覚者〉 (Senser) + 〈過程〉 (Process) + 〈現象〉 (Phenomenon)

e.g. She feared that something had happened to him.

〈知覚者〉 〈過程〉 〈感情〉

〈現象〉

○ 検証方法 (Probe)

(i) 〈参加者〉 (Participants) の一つは、人間 (知覚者) でなければならない。あるいは、少なくとも話者あるいは書き手によって人間的意図を与えられた者でなければならない。

(ii) 現象は事実あるいは出来事をさす。すなわち、各々の人に起った事柄。これは〈物質過程〉とは異なる。

(iii) do 動詞による検証はできない。

(iv) 通常時制は現在形が好ましい。

(c) 〈関係過程〉 (Relational process)

○ 意味

(i) 内包的 (Intensive) e.g. the lock is childproof: 'being'

(ii) 状況的 (Circumstantial) 通常、前置詞と共に表現される。e.g. the lock is on the fence: 'being in/ on/ up, etc.)

(iii) 所有的 (Possessive) e.g. the fence has a lock: 'having'

○ 構造

(i) 修飾的 (Attributive)

意味: a は x の属性を示す。

構造: 〈運搬人〉 (Carrier) + 〈過程〉 (Process) + 〈属性〉 (Attributive)

e.g. the lock is childproof
 Carrier rprocess: Relational: Intensive Attributive

(ii) 識別的 (Identifying)

意味: a は x と同一である。

構造: (i) Identified + Process + Identifier

又は Identifier + Process + Identified Identifier は、その物の特徴的な形、あるいは機能といったものによって Identified される物を指し示す物である。

e.g. That lock is the best one
 Identified Process: Relational: Intensive Identifier

(ii) Token + Process + Value

又は Value + Process + Token Token は、印、名前、形、占

有者等を指す。Value は意味, 指示物, 機能, 地位等を指す。

e.g. That lock is the best one
 Token/Identified Process: Relational: Intensive Value/Identifier

e.g. Senator Evans' offer was followed by four hours of delicate negotiations
 Identifier/Value Process: Relational Identified/Token

○ 検証方法

(i) 物の属性を示す文では, 主語と補語を入れかえることはできない。

e.g. *Childproof is the lock.

しかし, 識別を示すような文では, この二つの位置の語彙を置きかえることができる。

e.g. The best one is that lock.

(ii) 属性を示す場合は, 通常, 不特定の名詞であり, そして Identifier は限定された名詞でなければならない。

(iii) 動詞は通常, be 動詞あるいは have 動詞であるが, 他の動詞でも可能である。

属性を示すのに使用される動詞: become, get, turn out, grow, seem, etc.

識別を示す動詞: equal, express, mean, signify, constitute

(d) <言語的過程> (Verbal process)

○ 意味: 言葉で表わすこと

○ 構造: (i) Reported speech (間接的表現)

Sayer + Process + Reported

e.g. She said she had no idea
 Sayer Process Verbal Reported

(ii) Quoted speech (直接的表現)

Sayer + Process + Quoted

e.g. She said, "I have no idea."
 Sayer Process: Verbal Quoted

○ 検証方法

(i) <精神過程> に於て, 知覚者は人間でなければならない一方, <言語的過程> では伝える者は必ずしも人間とはかぎらない。例えば

the document said と云えるが the document heard あるいは the document feared 又は the document thought とはいえない。

(e) 〈存在過程〉 (Existential process)

○意味：何かが存在すること，あるいは出来事が起ること。

○構造：(there)+Process+〈存在物〉 (出来事又は物)

e.g. There is nothing he could climb on
 Process: Existential Existent: Entity

e.g. There was a terrible accident
 Process: Existential Existent: Event

○検証方法

〈仮主語〉が必要である。通常 there であるが時々 it も用いられる。しかしこれは代名詞の役割はしない。

e.g. It is terrible weather
 Process: Existential Existent: Event

(f) 〈行動過程〉 (Behavioural process)

○意味：生理学上又心理学上の行動をさす。

○構造：〈行動者〉 (Behaviour)+〈過程〉 (Process)

e.g. The mother cried
 Behaviour Process: Behavioural

○検証方法

(i) 一つの Participant しかない点で〈精神過程〉と区別される。

(ii) Participant は人間でなければならない。これは〈物質過程〉と区別される点である。人間を〈行為者〉としてとる自動詞でなければならない。

(2) 〈状況〉 (Circumstances)

(a) 時間 (Time)

○意味：(i) 何時に，何時から，何時まで， etc.

(ii) どの位の期間，何回位， etc.

e.g. today, before he fell into the pool, every year

(b) 空間 (Space)

○意味：(i) どこ，どこへ，どこから， etc.

(ii) どのくらいの遠さ， etc.

e.g. in Manhattan, into the pool, on the fence

(c) 様子 (Manner)

○意味：(i) いかにか、どのような、手段・方法

(ii) いかような (質に関するもの)

(iii) どんな様子 (比較)

e.g. with a hammer, quickly, like a butterfly

(ここで注意しなければいけないのは、受身文の動作主はたとえそれが Participant のように機能したとしても密接に手段と関係がある。)

(d) 原因 (Cause)

○意味：(i) 何故 (理由)

(ii) 何のために (目的)

(iii) 誰がために (利益)

e.g. because of his age, to call the twins, for the benefit of the Press, etc.

(e) 付属物 (Accompaniment)

○意味：(i) 他に誰か、他に何か(Commitative)

(ii) ~の代りに、~だけでなく(Additive)

e.g. without his brother, as well as the nurse, etc.

(f) 事柄 (Matter)

○意味：~について

e.g. as for the swimming pool, concerning the drowning rate, etc.

(g) 役目 (Role)

○意味：~として

e.g. in the shape of a bird, by way of explanation, etc.

(3) <付加的参加者> (Additional participants)

(a) 受益者(Beneficiary) について

○意味：動作の過程が目的対象物として向かう Participant

(i) <物質的過程>：

Recipient (もし物が相手方に与えられる時は前置詞 TOが使用される)

Client (奉仕行為が与えられる時は前置詞 FORが使用される)

○検証方法：〈受益者〉は前置詞と共に表現されることが多い。だから状況 (Circumstances) と混同されやすい。

e.g. She sent Jim her luggage.

〈受益者〉

〈受益者〉 Jim は前置詞 to を付して to Jim として her luggage の後に置くことができる。ところが次の文は正しくない。

* She sent San Francisco her luggage. San Francisco は〈受益者〉ではないからである。〈受益者〉 (Beneficiary) は必ずしも人間である必要はない。そして又、その〈物質的過程〉は、それが向かっていく対象物 (者) に必ず利益を与えるわけではない。

(ii) 〈言語的過程〉: Receiver 又は Target として考えることができる。もし〈言語的過程〉が 'mental process + causative' として解釈すると次の様に考えられる。e.g. tell は 'make know', convince は 'make believe', explain は 'make understand', etc.

(iii) 〈関係的過程〉: Beneficiary とする。Beneficiary は例えば次の文に見ることができる。

e.g. They voted *him* chairman. *him* を Beneficiary とする。

(b) 範囲 (Range) について

○意味：動詞の過程の範囲を限定する。

e.g. She climbed the mountain
Actor Process: Material Range

上の例では、動作の〈過程〉が行われる領域を示している。

次の例は、Range が〈過程〉そのものを示している。

e.g. They played football
Actor Process: Material Range

〈精神的過程〉 (Mental Process) に於ては、Range は、従来の伝統文法では同族目的語に等しいと考えられる。

e.g. I saw a sight
Senser Process: Mental: Perception Range

○検証方法

(i) do 動詞を使って検証できない。

e.g. * What did she do to the mountain?

(ii) 結果を示す限定詞は付加することができない。

e.g. * They trampled the field flat.

* They crossed the field flat.

(iii) 前置詞をしばしば付加できる。

e.g. He played piano.

He played on the piano.

我々の言語活動の中で言語の内容や意味は最も重要な情報である。観念内容的機能として実際の例文をとり挙げて、いかに現実を文法的枠組の中に入れていくのか、そして現実の経験からどのように意味を聞き手に伝えていくのかということを実際に整理してみよう。

1984年1月12日付のオーストラリアで発行された二種類の新聞から二つのテキストを選び同じ出来事を各々の新聞は、どのように言語として表現して発表しているのかを社会的文化的違いとして観察できる。テキストⅠは、*Daily Telegraph* の記事で、読者層は労働者階級であり、テキストⅡは *Sydney Morning Herald* という新聞からの記事であり主なる対象者は中産階級の読者である。

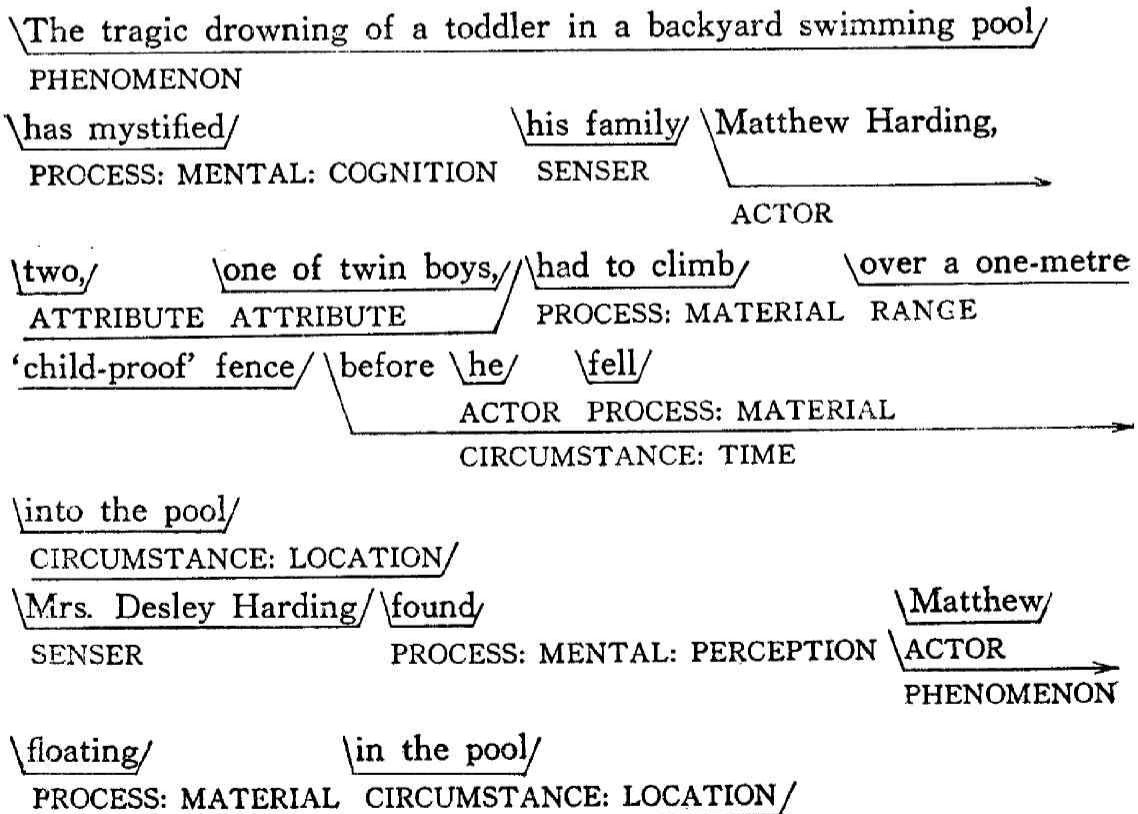
TEXT I *Daily Telegraph* January 12, 1984

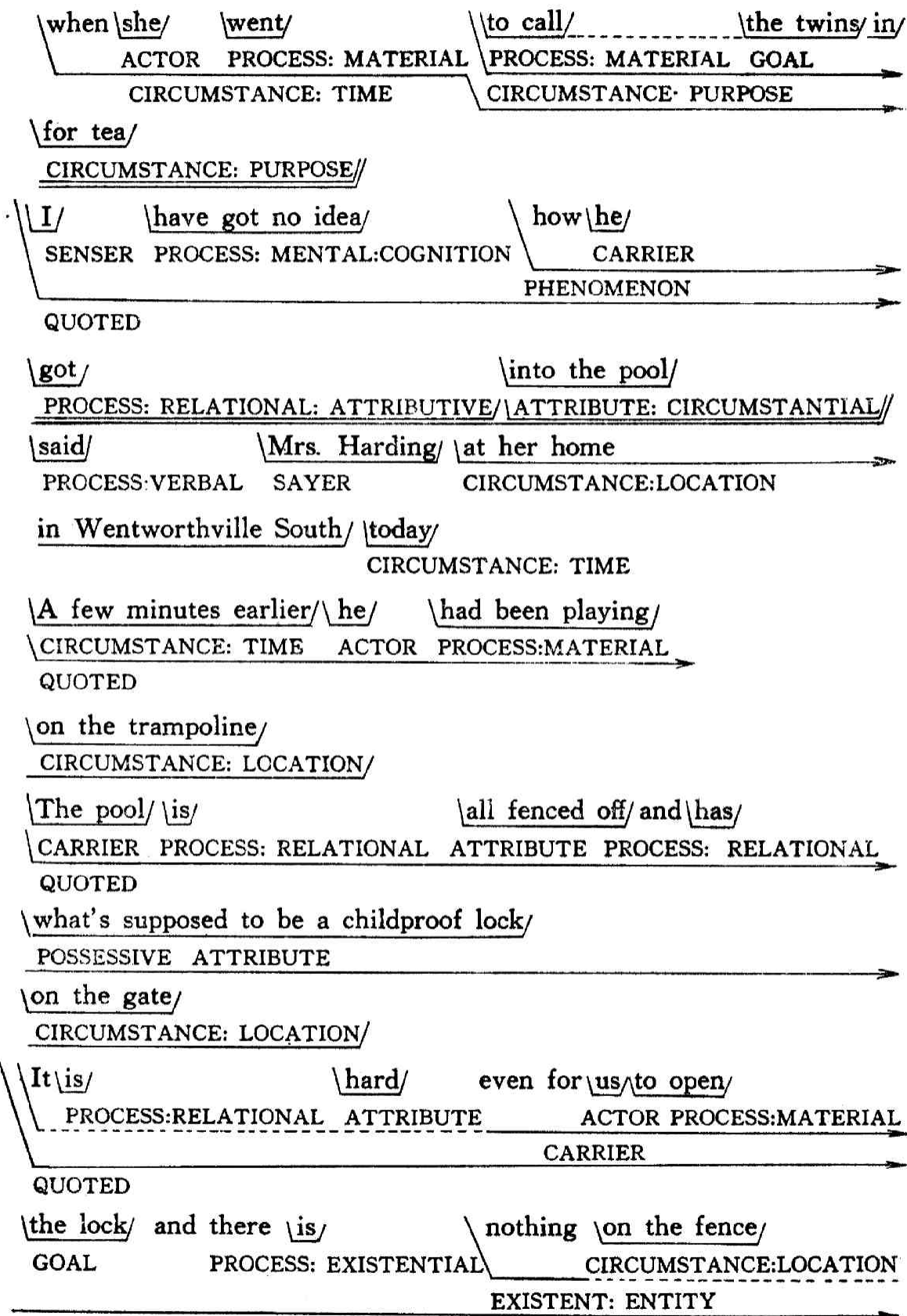
The tragic drowning of a toddler in a backyard swimming pool has mystified his family. Matthew Harding, two, one of twin boys, had to climb over a one-metre 'child-proof' fence before he fell into the pool. Mrs. Desley Harding found Matthew floating in the pool when she went to call the twins in for tea. "I have got no idea how he got into the pool," said Mrs. Harding at her home in Wentworthville South today. "A few minutes earlier he had been playing on the trampoline. The pool is all fenced off and has what's supposed to be a childproof lock on the gate. It is hard even for us to open the lock and there is nothing on the fence which he could climb up on." She pulled the boy from the swimming pool and tried to revive him. But Matthew died on the way to Westmead Hospital.

Text II *Sydney Morning Herald* January 12, 1984

Australia has one of the highest childhood drowning rates in the world with children under 5 making up a quarter of the toll. This is the grim news from Government studies of Australia's high incidence of drowning. The studies show over 500 people drown in Australia every year with backyard swimming pools the biggest killers for children under 15. Although children under 5 make up 8 per cent of the population they account for about 24 per cent of the drownings. The Minister for Sport and Recreation, Mr. Brown said the childhood drowning rate was higher than developed countries such as Britain and the US and comparable with many Asian countries. He said children should be encouraged to swim safely and parents should learn resuscitation techniques. "We are all conscious of the road toll and the increased risk of road travel during peak holiday periods," he said. "We need to be just as conscious of the need for water safety throughout the year."

SAMPLE ANALYSIS TEXT I





which he/ could climb up on/
 ACTOR PROCESS: MATERIAL//

She/ pulled/ the boy/ from the swimming pool/
 ACTOR PROCESS: MATERIAL GOAL CIRCUMSTANCE: LOCATION
 and tried to revive/ him/
 PROCESS: MATERIAL GOAL

But Matthew/ died/ on the way to Westmead Hospital/
 ACTOR PROCESS: MATERIAL CIRCUMSTANCE: LOCATION

SAMPLE ANALYSIS TEXT II

Australia/ has/ one of the highest childhood drowning
 CARRIER PROCESS: RELATIONAL ATTRIBUTE
rates in the world/ with children under 5/ making up/
 IDENTIFIED/TOKEN PROCESS: RELATIONAL
 CIRCUMSTANCE: ACCOMPANIMENT

a quarter of the toll/
 IDENTIFIER/VALUE

This/ is/ the grim news from
 IDENTIFIED/TOKEN PROCESS: RELATIONAL IDENTIFIER/VALUE
Government studies of Australia's high incidence of drowning/

The studies/ show/ over 500 people/ drown/
 SAYER PROCESS: VERBAL ACTOR PROCESS: MATERIAL
 REPORTED: PROPOSITION

in Australia/ every year/
 CIRCUMSTANCE: LOCATION CIRCUMSTANCE: TIME: FREQUENCY
 REPORTED PROPOSITION

with backyard swimming pools/ the biggest killers for children under 15/
 IDENTIFIED/TOKEN IDENTIFIER/VALUE
 CIRCUMSTANCE: ACCOMPANIMENT
 REPORTED PROPOSITION

Although children under 5/ make up/
 IDENTIFIED/TOKEN PROCESS: RELATIONAL

8 per cent of the population/ they/ account for/
 IDENTIFIER/VALUE IDENTIFIED/TOKEN PROCESS: RELATIONAL

about 24 per cent of the drownings/

IDENTIFIER/VALUE

The Minister for Sport and Recreation, Mr. Brown/

IDENTIFIED/TOKEN

SAYER

said/

PROCESS: VERBAL

the childhood drowning rate/ was/

CARRIER

PROCESS: RFLATIONAL

REPORTED: PROPOSITION

higher than developed countries such as Britain and the US/ and

ATTRIBUTE 1

REPORTED PROPOSITION

comparable with many Asian countries/

ATTRIBUTE 2

REPORTED PROPOSITION

He/ said/

SAYER PROCESS: VERBAL

children/ should be encouraged/

TARGET PROCESS: VERBAL

REPORTED: PROPOSITION

to swim/

PROCESS: MATERIAL

safely/

CIRCUMSTANCE: QUALITY/

and parents/

SENDER

REPORTED: PROPOSITION

should learn/

PROCESS: MENTAL: COGNITION

resuscitation techniques/

PHENOMENON

REPORTED PROPOSITION

We all/ are conscious of/ the road toll/ and

SENDER PROCESS: MENTAL: COGNITION PHENOMENON 1

QUOTED

the increased risk of road travel during peak holiday periods/ he/

PHENOMENON 2

SAYER

said/

PROCESS: VERBAL

We/ need to be just as conscious of/

SENDER PROCESS: MENTAL: COGNITION

QUOTED

the need for water safety throughout the year/

PHENOMENON

QUOTED

この二つの異なる新聞の報道に使われている動詞の過程 (Process) のタイプを整理した割合を示すと表1の様になる。

表1 動詞の過程(Process)のタイプの比率

過程の種類	Daily Telegraph	Sydney Morning Herald
物質的過程	11(55%)	2(13%)
精神的 "	3(15%)	3(19%)
言語的 "	1(5%)	4(25%)
關係的 "	4(20%)	7(44%)
存在的 "	1(5%)	0

表1で示す数字から次の様にまとめることができる。テキストⅠ (*Daily Telegraph*) の報道は、主に〈行為〉(Behaviour) と〈出来事〉(Happening) として伝えている。何故ならば〈物

質的過程を示す動詞の割合が多いことである。そしてその〈行為〉と〈出来事〉は具体的であって抽象的ではない。例えば使用されている動詞は *play, climb, fall, pull, revive, die* といった語彙であり、*the pool, the fence* といった具体的に物を示す語彙との関係を表わすのに〈關係的過程〉や〈存在的過程〉を用いているのに気がつく。一方、テキストⅡ (*Sydney Morning Herald*) の報道文は、政府や關係機関の発表という形式をとっている。溺死の事故における人口の割合についての統計に当たっては、〈關係的過程〉が用いられている。報道の特徴として、具体的な1人1人の個人としてよりも、年齢別の階層として言及されているのである。出来事は客観化され、物事として扱われている。例えば子供が溺れる事故を名詞化表現して *childhood drowning* として英語で表わしている。客観的表現方法は出来事や事件から言語的に距離を置くことになる。〈關係的過程〉の表現により他の物との比較や評価がなされている。

ここで注意しなければならないのは、文の多くが、引用された形式をとっていることである。ある時には、第一の文に〈言語的過程〉を示す動詞例えば *say, tell* といった語彙が用いられると、その後は、省略される傾向があるという事実を考慮しなければならないであろう。新聞報道は常に直接的に事柄を述べるかわりに、むしろ〈伝える〉〈述べる〉といった語彙を用いて事件や出来事を報道する習慣があるし、あるいは、新聞や報道のことばとして、ニュースの出所に必ず言及したいまわしをしているということも特徴の一つであろう。

テキストⅠ (*Daily Telegraph*) では、動詞の〈過程〉に強調点が置かれ、テキストⅡ (*Sydney Morning Herald*) では、名詞(句)で表現されている〈物事〉に重点があるといえる。テキストⅠについていえば全体の中で動詞の〈過程〉の占める割合は、24%であり、テキストⅡではこれ

より少なくとも16.5%となっている。

状況についての二つの新聞の違いは、まずテキスト I (労働者階級向けの大衆紙) では、特定の時間と事故の起きた場所を

詳しく述べる立場をとっている。テキスト II (一般中産階級向けの新聞) では、状況を示す時や場所の数が少ないだけでなく、一般的な表現方法を用いる特徴がある。例えば、テキスト II で、in Australia, every year であるのに、テキスト I では、at her home, in Wentworthville South, a few minutes earlier といった時や場所を指示する語彙が具体的であり、更に出来事の間における時間的又論理的関連性を持たせながら情報を伝えている。一方テキスト II では、詳しい時間的つながりや具体的場所の名を明らかにしないで、ただ事件の内容を語っているにすぎない。

次に示している表 3 は動詞の〈過程〉における Actor, Sayer, Carrier を表わす主なる語彙を選び出したものである。

表 3 から次のようにまとめることができる。テキスト I (*Daily Telegraph*) では、動作主 (Actors) は特定の具体的な人であり、語る人 (Sayers) は事件の中に出てくる普通の人であって、特別の人や政治的機関ではない。関係的過程の運搬人 (Carrier) は具象物である。テキスト II (*Sydney Morning Herald*) では動作主 (Actors) は個人でなく集団の人々 (classes of people, population groups) であり、語り手 (Sayers) は政府当局 (Government authorities) であり、〈関係的過程〉では名詞(句) は、一般の人、

表 2 状況 (Circumstances) の種類

	テキスト I	テキスト II
時 (Time)	3	1
場所 (Place)	6	1
目的 (Purpose)	2	0
同伴 (Accompaniment)	0	2

表 3

	テキスト I	テキスト II
物質的過程	Matthew Harding, Mrs. Desley Harding	people, children of various age groups
精神的過程	Mrs. Desley Harding	parents
言語的過程	Mrs. Desley Harding	the Minister, Government study
関係的過程	the pool, the fence	statistics (children under 5) abstraction (childhood drowning rate, australia)

抽象観念の語彙が選ばれている。次に〈精神的過程〉の *Sensers* は特にテキストⅠについて、テキストⅡについては一般に、特定の人ではなく一般の人ということになっている。しかしテキストⅠの〈精神過程〉は否定の意味内容で用いられている。例えば、*Mrs. Harding has no idea; The family is mystified.* 一方テキストⅡの中の〈精神過程〉は強い肯定的な意味内容で用いられ、前後との調和がとれている。例えば、*parents should learn; should be conscious of, etc.* 更に、〈精神過程〉を示す動詞はテキストⅠでは初めの部分である主題に触れるのに使用され、テキストⅡでは終りの部分であるニュースとしての報道の部分で使用されている。

以上、まとめてみると、テキストⅠについては次のことが云えるだろう。動詞の〈過程〉(Transitivity)の選択は、この種の語りの様式に適している。語りは名詞化(e.g. *the tragic drowning*)で始まり、その名詞化された出来事の提示の仕方は、出来事を単に公開するというよりはむしろ出来事全体をまず把握させる対象物として提示している。冒頭でまず未だ解決しない道徳的問題(幼い子供の不慮の事故)を提起している。それは人々に訴えかけているようである。「子供の水死事故を防ぐのに出来るだけのことは、やったはずの賢い母親にとってどうしてこのような痛ましいことが起るのでしょうか?」と……これは運命が命を思うようには操作できない不思議さを語っている感じがする。初めに読者(特に高い教育のない労働者階級)に感情的に訴えるのに〈精神過程〉を表わす動詞が使われているといってもよいかと思う。後半の部分になると、子供に対してどのような処置を母親がしたのかを具体的に伝えている。その結果 *Mrs. Harding* は出来事が実際に起るまでの様子とその後の母親の行動を語るわけであるから、場所(location)を示す〈状況〉(Circumstances)と具体的行動を表わす〈物質的過程〉(Material process)が多く用いられる結果となっている。

ところでテキストⅡの動詞の〈過程〉は、説明文に適しているといえる。特に前半では客観的な説明になっているが後半に進むに従って内容の調子は忠告的になっている。すなわち議論の余地のないこの事件についての語りの調子は命令調で両親に対する忠告と教訓にまで達するという結果になっている。テキストⅠと違って結末に達すると、人の運命は人間の努力と注意によって統制できるという前提条件を示している雰囲気さえある。人命は政府や親によって充分守られることができるという考えがこれらの文

からうかがえる。

以上このようにテキストの分析をしていくと話し手あるいは書き手の意図、気分、考え、立場そして社会階級別の見解は、まず種々な動詞の〈過程〉(Transitivity)の中から言葉として表現するのに最も適した〈過程〉の動詞が選ばれて記述されているというのがわかる。我々の現実の世界で起っている現象をどのように捉え分節して、言語に置きかえるのかという問題はあまりにも日常生活の中で、当たり前になって記号化と現実との相関関係という興味深い事実を忘れがちである。同じ種類の情報を伝える時、各々の伝達者は記号化の作業の中に、自分達の見解、立場、状況といった種々なものを組み込んでいくのであるが、これらをいかに(How)言葉の中に組み込んでいくかという問題がある。我々は無意識のうちに言葉を選択しているように見えても、現実の現象を認識し分節した時に各自の頭の中の考えは言葉の中に写し出されているとあってよいだろう。言葉として表出されたものは、当然各人の思考や判断の反映された姿として我々は考えるのである。実際に各々のテキストで用いられている記号である言葉进行分析することによって充分目的を達成するに適わしい言語が選ばれているか、あるいは読者に訴えるだけの説得力が使用されている言語であるかといったことを知るのに Halliday の観念内容分析 (Transitivity) は有効な方法の一つだと思われる。

注

- Halliday が使っている専門用語例えば Circumstances, Participants, Process, Token, Value 等についての訳語は日本語に訳さない方が理解しやすいと思われるので、あえて日本語に訳さなかったことを記しておく。
- Birch, D. and O'Toole, M.(eds.)(1988), *Functions of Style*(London: Pinter).
- Halliday, M. A. K. (1977), *Aims and Perspectives in Linguistics* (Sydney: Applied Linguistics Association of Australia).
- Halliday, M.A.K.(1978), *Language as Social Semiotic* (London: Arnold).
- Hasan, R. (ed.) (1985), *Discourse on Discourse* (Sydney: Applied Linguistics Association of Australia).
- Steele, R. and Threadgold, T.(eds.)(1987), *Language Topics* 1, II (Amsterdam: John Benjamins).
- Thibault, P.J.(1986), 'Text, Discourse and Context: A Social Semiotic Perspective', in Monograph Vol. 3, Working Papers and Prepublications of the Toronto Semiotic Circle (Toronto: Victoria University).

Threadgold, Terry(1988), 'Language and Gender', in Magarey, S. (ed.), *Australian Feminist Studies* (South Australia: Graphic Services Pty).

Threadgold, T., Grosz, E.A., Kress, G. and Halliday, M.A.K. (eds.) (1986), *Language Semiotics Ideology* (Sydney: Pathfinder Press).

資 料

Text I *Daily Telegraph*, January 12, 1984.

Text II *Sydney Morning Herald*, January 12, 1984.